

余の見聞せる南米

藤崎三郎助

一、序言

私の此度の旅は、砂糖會社の經營者として、南米から歐洲へかけての、砂糖市場の大勢狀況の視察を主題としたものであるが、此所には、其視察談は、直接關係を持たれぬ方々には興味薄きものと考ふれば、特に述べず、唯巡覽中の所感の一つ二つを述べることにしよう。

二、キューバ島にての所感

キューバ島は、私が何も新しく言ふ迄もなく大方お承知の甘蔗砂糖の生産地である。面積は、四萬五千八百二十二方哩、分れて六州となつて居る。

此島へ來て一驚したことは、我々の臺灣に於て經營する事業であるが、甘蔗の苗を植えて、肥料、灌漑を施すといふ始末だが、此島は、氣候、土壤の利を得て、左様な手数は全く要らず、一度甘蔗を植付くれば、夫れは所謂砂糖の水となつて、十年二十年其の儘に投つて置いても、莫大の收穫がある、とい

ふことであつた。我々の事業はとても競争にも何にもなつたものではない。私が参つたのは、五月の七日で、恰も雨期、気温は我國の夏で、暑い盛り、其の中を、毎日午後二時頃から時間を定めて大降雨があり、また忽ちに晴れて、傾く夕陽に輝く椰子樹、島の風光は宛然詩である。ハバナ港は、此島第一の都市である。此港で目立つたものは、住宅地の経営事業であつた。夫れは、キューバ人自らのつくつた、三億萬圓の土地會社の経営で、三、四の公園（中に日本式のものもあつた）を圍んで、規模頗る廣大の住宅が建設されつゝあるのである。で、此の驚く可き大規模の住宅地経営は、糖價一袋二十二圓から五十五圓もした好況時代に、キューバの成金連中が集つて経営に着手したものが其の中半に及んで恐慌來で、此の事業も思しからず、未だに未成の儘となつて居る。兎もあれ三百萬人のキューバ島全員を收容して、なほ餘りある住宅地経営當時の目的は、合衆國より十二時間乃至十時間で通ひ得る此の島を、彼國人の遊び場所、禁酒で不自由を経験しつゝある彼等に、自由飽滿の娛樂境を提供しよう、とした點に認められる、そして、此の住宅地経営事業が全く成就するの日は、其の目的も同時に達成されるであらう。

また、私の参つた時に、丁度新舊大統領の更代の當日に逢遭することが出來た。此所で一寸政治事情を述べると、議會勢力は、國民黨保守党、及び中立の三派であるが、亦二分して反米派と親米派に區別され、其の勢力は相伯仲の間にある。しかし、島民の一般傾向は、反米熱に高い、にもかゝはらず、大

統領は何時も親米派から出て居る。これは、米國の壓迫干渉の甚しい事情によつてである。大統領選舉當日のぬき、兵士軍隊が米國から派遣されると謂へば、其の干渉は想像の前に出るのである。で、島民一帯の反米氣分は、内地を巡行しても意外に強く受けとれる。一寸面白いエピソードを入れると、私は、新舊大統領更代の日、舊大統領が、あたふたと家族十二人を連れて、大統領官舎から波止場に直行して、巴里を指して旅途に就いた光景を見た。何故そのようなことをするのか、と謂へば、大統領の任が解けて、護衛もなくなつてから、まご／＼して居ると、反米派から如何なる危害を加へられるか知れないからである。

キューバには日本人は少ない。支那人も少ない。で、島民は日本人と支那人との區別がつかない程度である。しかし日本人に對しては愛敬を持つて居る、ある所で、私が日本人である、と證明すると、『日本人は勇敢だ、自分等は米國の干渉を甚しく受け結局國を奪はれるのかも知れないが、聞けば日本と米國との間には種々の問題が出来て居る由だが、勇敢な日本は何故黙つて居るのが、日本は戦へば必ず勝つだらう、勝つて欲しい、自分達は大ひに聲援を惜まない、云々』と、熱狂的な歓迎をしてくれた。島民は非常に日本人を歓迎する。また米國の勢力扶植も驚く許りで、或は機會いたれば、米國の支配下に屬するようになるのかも知れない。

三、米船にて船員のストライキに遭ひて

キューバから紐育に向ひ、更にブラジル國のリオデジャネイロ港へ赴かうとした行程で、船員のストライキに遭つて當惑した。船は米國船であつた。ストライキといふことは、後で聞いたのだが、先づ船は出帆時刻を五時間ほど經つて動き出し、食堂に下りて見ると、給仕人の無禮はお話にならず、どうも可怪しいと思つて居ると、船は紐育港外七八哩の所にやがて泊り、明朝出港して、暫時航行したと思ふと、忽ち方向は轉せられた紐育に戻り、先に泊つた所に投錨した。私は、この時始めて船員のストライキを知つたのである。三、四十人の船員が罷業上陸してしまつたので、航行に狂ひを生じ、食堂ボーイから運轉士機關士が居なくなり、機關長は驚き狼狽して、新雇機關士を入れて、兎に角航行に就いたが、罷業氣分が抜けず、とても遠航は覺付かないので、また引き返して、一日を費して、機關士を雇入れる、といふ始末であつた、と判つた。

斯くて漸くりオデジャネイロ指して船は動き出したが、其の途中でまた、新來の機關士が、無經驗から機關水を使い過ぎて、ムホガニヤの島に寄るやら、何やらの騒ぎにも遭ひ、爲に旅行日程に大分狂ひを生じ、非常に迷惑をした。

四、ブラジルにての所感

ブラジルは、南北アメリカ各國中第三位を占め、カナダの三分の二の面積を有して居るが、人口は稀薄で二千萬人に過ぎず、夫れも雜種族である。内地は森林地と、何分氾濫の爲に不毛となつて居る土地

とに區別さる可く、僅かに海岸線通りに文化を見るばかりである。

日本移民は、今より十六年前には、公私の目的を以つて渡つた者八名(内四名は私の仕事従業者)と、元は日本生れであつたが、日本人だか何うか知らない、といふ輕業師が一人居たのみであつたが、今にサンバラロバラナあたりに、約十萬人を算するにいたつた。

リオデジャネイスは、以前は不健康地で、地方病の流行なぞ恐れられたものだが、今は、衛生設備の如きも極めて整然と、規模廣大に行き届いて居る。港灣の風光は、全く奇蹟的風光と謂ひつ可く絶佳である。

海岸線に沿ふた一帶には、汽車はあるが、連絡はされてない、思ふに、汽車の便によるよりも、船の便を用ひて居るのであらう、尤も、リ港以北には、英人經營の、設備の英國式なる汽車の連絡がある。

同國人は、一体に日本人に對して好感情を持つて居る。土人とポルトガル人の混血兒である彼等は、一寸日本人に似て、日本人と人種を同じうするのだ、などと彼等は考へて居る、で、日本の殖民地を世界に求めて、此のブラジルの右に出づるものなきを私は痛感した。ブラジルは、石油を生産しないのみで他のものは悉く生産する。まことに世界の寶庫で、我が絶好の殖民地である。

ブラジルには、殺人が可成り多いようである。しかし、ドートル、コロネル、と謂ふ階級、つまり上流貴紳は、人を殺しても、たつた五十圓位の罰金で免かれる慣習になつて居る。そして、死刑は全く無く、普通人以上のものなら禁錮、懲役等の具体的刑罰を受けずと濟むといふ風習がある。で、彼等はど

ストルと短剣を提げ、一旦に、三、四人の殺傷がある。（但し日本人に對する暴行を聞かず。）政治事情を語せば、各州聯邦で、州毎に大統領（？）のようなのがあつて、其の政治を執り、州毎に兵隊を具へ、外に州同志干戈を交へるものもある。

私は、汽車も通じない内地深くへ、自動車で入つて見た。尤も、デンケイラといふブラジル人の大農の工場視察の爲であつたが、其の土地より深く更に入つたのである。すると、行方に當つて、三、四十人の一行が私一行を待ち構へて居るようなので、所謂土匪、馬賊のような徒ではあるまいかと内心ビリビリ物で行きかゝると、夫れは、我が移住民であつた。人々は、私の通過を出迎へてくれたのである。そして、（此の地を通過した邦人は、我が公使と、サンパウロの總領事だけで、民間では貴下を以つて嚆矢とす）と熱誠ある辞を述べてくれた。

私は、ブラジルの移住民が、政府的背景を持つて居ないことを、非常に氣の毒に痛感した。